

令和2年度「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」 事業実施報告書

- I スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び
- II マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成
- III スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築
- IV 日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成
- V スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成

道府県・政令市名【 茨城県 】

学校名【 牛久市立下根中学校 】

1 実践テーマ	Ⅲ・Ⅴ
2 実施対象者 (学年・人数)	第1学年・177名
3 展開の形式	(1) 学校における活動 ① 教科名 (総合的な学習の時間、道徳、保健体育) ② 行事名 (東京パラリンピック日本代表選手の講演を聞く会) ③ その他 () (2) 地域における活動 ① イベント名 () ② その他 ()
4 目標 (ねらい)	○オリンピック・パラリンピック・ムーブメントの普及・推進を図るとともに、スポーツ機運の醸成を図り、生徒が生涯にわたって豊かなスポーツライフを継続する資質や能力を育てる。 ○障害者スポーツについて学び、共生社会の在り方や今後の生き方について考える機会にする。
5 取組内容	1 オリンピック・パラリンピック教材「I 'm POSSIBLE」を活用した事前学習 道徳の授業で、原市紘奈さんの資料を使い、「公平」について考えることで、一人一人の違いを理解し、工夫すれば誰もが自分のベストを尽くすチャンスがあることを学んだ。    2 学年フロアにオリンピック・パラリンピックコーナーを設置したり、朝の会でのパラリンピック競技の紹介を行ったりして、オリンピック精神の醸成を図った。  

3 オリンピック・パラリンピック教育推進事業教育講演会・ゴールボール体験

(1) 実施日 令和2年12月9日(水) 13:30~15:30

(2) 講師 東京パラリンピック ゴールボール日本代表

山口 凌河 氏

演題「諦めない力・理解する心」

～障害者アスリートから学ぶ～

(3) 内容

ア 山口氏の自身の生い立ちや経験を含めた講演

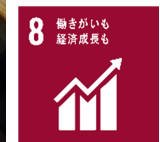
イ ゴールボールデモンストレーション・体験

ウ 競技用具の紹介・質疑応答



4 SDGsターゲット4「質の高い教育をみんなに」、8「働きがいも経済成長も」との関連を図り、タブレットPCを使用しての振り返りの入力

本校の総合的な学習の時間の柱である「SDGs：持続可能な開発目標」との関連を図り、インクルーシブ教育システムについて山口氏から学んだ。障害者がどのように社会参画し、共生社会を形成しているか知ることができた。さらに、講演会後の振り返りは、タブレットPCを活用し、Wordで文章入力した。Wordの読み上げ機能を使うと、入力した文章をタブレットPCが読み上げるので、視覚障害がある方へ文章を伝えることができる。山口氏から新しいコミュニケーションツールを覚えてもらった生徒たちは、全員作成し、山口氏へ送付した。



5 哲学対話「本当の共生とは？」

講演会後に総合的な学習の時間に、共生社会の実現のために哲学対話を行った。自身の経験などを交えて、共生社会について考えを深めた。



	6 保健体育でのゴールボール体験 購入した教材でゴールボールを体験した。全員が実際に体験したことで、ゴールボールに対する興味・関心や視覚障害者の気持ちを理解することができた。   
6 主な成果	【生徒の振り返りから】 生徒の振り返りからは、山口氏の困難に打ち勝つための思考や、一つ一つの言葉が心に残り、障害を個性と捉え、前向きに生きていくことの大切さに気付くなど、今後の生き方について考える機会となった。 (生徒A) - 私は障害があるわけではないけれど、これから様々なことで苦しむことは、多数にあると思います。そんな時自分に与えられたものは何かを見つめ、些細なことでも大切にしていける人になりたいです。山口さんのように明るくみんなを笑顔にできる勇氣は正直ないけれど、「人の素敵なおところを見つけられる、沢山見つけられる」そんな姿を見習いたいです。人がみんな平等でないことにどんな意味があるのか、どんな大切なものが隠れているのか、改めて考えられる貴重な体験となりました。 (生徒B) - 講演で学んだことは、できないことを考えるより、「できることを考えた方が良いということ」、「障害は差別するものではなく個性ということ」、「周りにいる友達、家族を大切にすること」です。これから先に生かせるなと思ったことは、大きな夢をもち、たとえ自分の好きなことができなくなっても自分のできることをあきらめずに続けていくことで、そのことが自分の心にとっても響きました。
7 実践において工夫した点 (事業の特色)	- 山口氏の苦悩や葛藤を聴いて、生徒たちもいつ自分が障害とともに生きるかわからないという自覚をもち、障害を身近に感じることができた。 - SDGsとの関連を図り、共生社会の在り方について実生活に基づいて考えることができた。 - 総合的な学習の時間の他に、保健体育、道徳など他教科との関連を図り、教科を横断したカリキュラム・マネジメントが実践できた。 - 講師との事前の打ち合わせを行い、本校のねらいに沿った講演会と体験を行うことができた。
8 主な課題等	- コロナ禍ということで、スケジュール調整や講師の選定、会場の人数や消毒など実施に向けての配慮事項が多かった。 - 来年度以降、継続して障害者スポーツを実践していくために、本事業を教育課程の中に位置づける必要がある。事前・事後の学習を含め、教科を横断したさらなるカリキュラム・マネジメントの充実が必要である。
9 来年度以降の実施予定	- 一過性の学習にならないために、東京パラリンピックの新聞記事やニュース映像を活用し、共生社会への理解や実践方法についてさらに学びを深めていきたい。 - 豊かなスポーツライフの実現のために、「する・見る・支える」といったスポーツへの多様な関わり方を実現し、国際理解や、文化としてのスポーツの価値を高めていきたい。